

「環境を整えば“障がい”はなくなるかもしれない」これは、僕たちが、発達障がいの訪問授業の中で高学年、中学生に伝えている事です。車いすの人が、台の上に乗れないというのが障がいだとすると、環境を整えるのは何が必要か？という質問をします。ほとんどの人は「スロープを付ける」と答えますが、「じゃあ、スロープがあるだけで上がれますか？」と。そうなんです。押す人が必要です。押す人、すなわちみんな、ひとりの人が環境なんだよと。その環境を整えようねと。ほんとうにそうなる日が来ると信じています 久田

第 76 回 『わかるように伝えていますか』

香川大学 坂井 聡

環境が障がいを作り出す？

今、ここで停電が起こったとします。停電がしばらく続くということなので、今している仕事は中止になります。しかし、帰ろうと思っても電気がつかないのです。しばらくの間待ってみました。電気は復旧しそうにありません。おまけに運の悪いということになりますが、携帯電話の充電も切れているのです。明かりの代わりにともならないのです。そして、外も闇夜だったのです。このような状態のなかで、みなさんはどうやって移動するだろうか。意を決して帰らなければならないのです。真っ暗ななかを帰らなければならないのです。四つ這いになったり、壁づたいしたりしながら、そろそろと移動していくことなのでしょう。門で頭を打ったり、ドアのノブに背中をぶついたりしながらそろそろと歩いていくことになるのです。

ところが、どういうわけでしょうか、そんなあなたの横をすたすたと歩いて帰る人がいるのです。どういう人だと思いますか？ あなたの職場を、職場の外をいつもと同じように、歩いていくのです。職場周辺を歩き慣れた人だろうか？ 闇夜でも目が見える人でしょうか？

いや、そうではありません。その人とは、今、みなさんが視覚障がいがあるといっている人たちなのです。視覚障がいのある人たちは、白杖をつきながら、「今日は人がいっぱい四つ這いで動いているぞ。何があったんだろうか？」などと考えながら、移動できなくて困っているあなたの横をすたすたと歩いていくのです。真っ暗な環境になると、たちまち多くの人が視覚に障がいをもつことになってしまうのです。

つまり、真っ暗な環境では、晴眼者といわれていたあなたに障がいが生じ、視覚障がいがあり、「いろいろ困ったことがあって苦労するので大変ですね」と言われていた人の障がいがなくなることになるのです。このように、環境が変われば、誰もが障がいをもちうることになるのです。今回から、環境調整することの大切さについて考えていこうと思います。

坂井聡先生の紹介

(プロフィール)

香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

(著書)

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など